



世界を知る ～It know the world～

このページでは、「世界を知る」をテーマに独立行政法人国際協力機構(JICA)デスク熊本や、国際交流・協力分野で活躍している皆様のご協力を得て、日本で生活する私たちには日常知ることができない興味深い世界の状況を紹介しします。

「ブラジル・サンパウロの日系社会」

JICA 日系社会シニアボランティア OG 大塚 雄子さん
(平成 24 年 7 月～平成 27 年 7 月 ブラジル派遣 職種：栄養士)

地球の反対側に位置するブラジルには現在約 150 万人の日系人が暮らしていると言われています。

赴任してサンパウロに着くと、日系社会最大の催し「日本祭り」の最中でした。その規模の大きさと、ここに“日本”があることにびっくりしました。出身ルーツの都道府県ごとに工夫を凝らした郷土料理が実演販売され、様々な肌の色や髪型のブラジル人が、列をなしておいしそうに食べていました。熊本県のブースでは“辛子レンコン”と“おはぎ”が売られており、早くも故郷の事を思い出しました。この祭りは毎年3日間で15～18万人の人出があるそうです。

配属先の社会福祉法人「こどものその」は、今年で創立 57 年です。日系の知的障がい者のために作られた施設ですが、園生達の高齢化も進み、平均年齢は 49.5 歳です。60 歳以上も 18% となり、高血圧や糖尿病など生活習慣病も出ていました。職員はじめ多くの方々の協力で、野菜豊富なバランスの良い食事と、毎朝のラジオ体操やウォーキング、足の筋力体操などを行うことで、園生達には生活習慣病の改善が見られました。



《同僚の調理スタッフ達》
(筆者：前列中央)

施設では、食事の前後には手を合わせて「いただきます」「ごちそう様」を全員で唱えます。お雛様、花祭り、こいのぼり、運動会といった日本の文化行事と、フェスタ・ジュニーナなどブラジル行事が混合で行われています。8 割が日系の園生達は、ポル

トガル語でブラジルの歌を歌い、カラオケ大会では日本語で演歌を歌います。

ブラジルでは定番のフェイジョン（豆を柔らかく煮たものにニンニクと玉ねぎを炒めて入れた塩味のスープ）をご飯にかけて食べますが、寿司や焼きそばも地元の職員に人気です。

リベルダーヂという東洋街では、日本食のお店も多く、ラーメン屋の前ではいつも行列ができています。日本食の食料品店では、納豆、豆腐、インスタントラーメン、調味料などなんでもそろっていて、日本米、大根、ゴボウ、柿、デコポンも店先に並んでいます。

柿はブラジルでも caqui と発音しますが、施設のブラジル人調理スタッフさんは caqui はブラジルの果物と思っていたほどです。文化だけでなく、南米の野菜や果物までも違和感なく同化している様が面白く感じられました。

近年は、日系社会でも肉食、油、砂糖の消費が多いせいか生活習慣病の方も多そうです。日本文化福祉協会から依頼があり「高齢者のつどい」で食事の話をする機会もありました。こういう機会はあまりないらしく熱心に聴いていただき、たくさんの質問が出ました。

帰国して距離は遠くなりましたが今でもすぐそこに日系社会があると感ずります。これからも両国が益々近い存在になることを願っています。



《サッカー（ワールドカップ）の応援》
(筆者：前列右側)